

二種深信の意義

稻葉秀賢

善導が『観経』の深心を釈して

「深心と言ふは、即ち是れ深信之心也」

と云えるについで、『六要』には能信の相を明かすといひ、また

「亦二種有り、一には決定して深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流転して、出離之縁有ること無しと信ず。二には決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を攝受して、疑ひ無く慮り無く、彼の願力に乗じて、定んで往生を得と信ず」

という文に就いて、「所信の事を願す、是れ則ち機法二種の信心なり」といっている。何故に善導は深信の相を明かすに、機法二種の所信の事を開いたのであろうか。ここに二種深信と云われる機法の関係に深い関心を抱かずにはいられない。

思うに仏教は人間苦の解脱を説くものであって、人生に於ける禍福を解決しようとするものではない。人は多く現在の禍福のみ問題として、禍福から離れ得ぬ人生そのものを課題としない。今日と同じように明日が明ける、今年

と同じように来年が来るといふことに疑いを持つものはない。ただいたずらに明かし暮して年月を送るばかりである。こうした日常性のなかに停滞する限り、自身が問題となることはないであろう。然し、誰が明日を約束し、誰が明年を保証してくれるであろうか。無常迅速の重さのなかにある自己の再発見において、始めて今日の生が課題となり、善導が「自身は現に」といった痛烈な心境が身に迫るのである。日常性のなかに停滞する自己の告発においてのみ、一心信樂の世界が明らかにせられるのであって、二種深信を開いた善導の心境には深い懺悔と讚嘆が渦巻いていたことが思われる。まことに機の深信は人生そのものを問題とせるものにとつての懺悔であり、地上の生活を約束せられた人間の身をあげての懺悔である。之に対し法の深信は地上の自身が仰ぐ天上の光の讚嘆であつて、「阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受し」給うといふ本願のまことは、如何に讚嘆しても讚嘆し尽せぬものである。宗祖が晩年の信境を詠いあげられた『正像末和讃』を貫くものはやはり懺悔と讚嘆であつて、それによつて、

「弥陀の本願信ずべし 本願信するひとはみな

撰取不捨の利益にて 無上覚をばさとるなり」

といふ一心信樂の世界が開示せられたのである。

かくて善導が二種を開いた心境には深い信体験の内実が示されているのであつて、『歎異抄』の後序に

「聖人のつねのおほせには、弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懐さふらひしことを、いまた案ずるに、善導の自身は罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみつねに流転して、出離の縁あることなき身としれといふ金言に、すこしもたがはせおはしませず」

とある文を想起せしめられる。ここに先学が二種立意といつて、細微を極めた論究のあとを顧みつつ、その意趣にふれてみたいと思ふのである。

思うに善導の解積は極めて人間的であって現にあるわが身を起点とするものである。是の起点を明らかにするものは至誠心の積であろう。即ち至誠心における課題は衆生身口意の業に修する解行が至誠であり得るかという現実の課題である。とかく日常性のなかに埋没するわれわれは日常的な利害得失のなかに流されて、この最も重要な課題を忘れてゐる。人間存在の規範とした道徳が要求されるのも、この課題に応ずるためであって、この課題は人間存在そのものの根本的課題である。殊に眞実清浄の土を願うものにとって、眞実清浄の解行が要求されるということは当然である。然るにわが身の現実を反省するとき、貪瞋邪偽姦詐百端であって、その解行は虚仮雑毒の行と云わざるを得ない。たとい身心を苦勵して誠心誠意を尽しても、それは雑毒の善であることを免れない。身心を苦勵することとは、道徳的理想を想起せしめるものであって、道徳的には如何に善を積みあげても、それに依って満足することがあり得ない。それが却って道徳の立場である。従って如何に善を求めても惡にまつわられて、どうにもならぬ自己努力の限界を傷まざるを得ない。この限界において我々は眞に出離之縁あることなしと深信せざるを得ないのであって、機の深信はただ自力無功を知らしめんが為である。

人間が道徳的であるということは美しいことである。従って我々とはもすれば道徳的な解行においてかすかな満足を感じ、それを誇りさえするのである。然し眞に至誠であるということは、小さな道徳的満足に安住することではなくて、常に至誠たらんとして至誠たり得ない反省において、愈自己を道徳的たらしめるものである。それ故に身口意業に修する解行は常に眞実心中に作すべきであり、外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を抱いてはならぬのである。けれども道徳的反省が深ければ深いほど、貪瞋邪偽姦詐百端の生活が照し出されるのである。そしてそこで始めて道徳的であるという自負心が打ち砕かれる。自負心が打ち砕かれるということは、自力無功と知らしめることであ

る。ここに於いて外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなりという傷みがわが身を貫くのである。この心境に於いて始めて、「真実は如来なり」という如来の大悲が感知せられるのである。まことに真実は常に人間に要求せられるけれどもそれは衆生のものでなくて如来のものである。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなりという悲傷において已に大悲の仏心に触れているのである。それ故に如来の真実を感知するものは、現実の虚仮を知らしめられ、現実の虚仮が知らしめられるところに如来の真実は感知せられるのである。かくて至誠たらんとするわれわれの願いは、自己に於いては絶望であり、ただ如来の真実を須いるほかはないのである。まことに至誠心は真実の世界を願生する者に第一に要求せられたものであった。然るに我々において真実であることが絶望であり、虚仮を離るることを得ないとすれば、われわれは如何にすべきであろうか。ただ善導の云う如く、「彼の阿弥陀仏因中に菩薩の行を行じたまひし時、乃至一念一刹那も、三業の所修皆是れ真実心の中に作したまひし」真実を須いるほかはないのである。そしてこの如来の真実は虚仮不実の身を傷み、雑毒虚仮の善を廻して仏の浄土に求生しても必ず不可なることを感知した身においてのみ感ぜられるものである。まことに雑毒虚仮の我々をあわれんで如来は清淨真実の行を成就せられたのである。ここに如来の真実を須いるということは、如来の廻向をあらわすのであって、如来によって廻向せられた清淨真実の解行こそ、念仏生活に外ならない。

かくて存覚上人が『六要鈔』に

「正しく有善無善を論ぜず自らの功を仮らず、出離偏へに他力に在ることを明かす」

と解釈せられた意味を知ることができる。そして先徳はこれを受けて二種深信の意義について、

一 自力を捨てて他力に帰せしめんが為

二 機の疑を除いて願力を信ぜしめんが為

といている。前者は特に機の深信について、後者は法の深信について云えるものである。然るに機の深信に就いて

古来種々の異義を称えるものが多かったのである。第一には機の深信は凡夫に通ずるけれども、賢者には通じないという説である。蓋し『散善義』には罪惡生死の凡夫といい、『往生礼讃』には、「自身は是れ煩惱を具足せる凡夫」といつてあるから、それは聖者には通じないというのである。殊に常没常流轉の自覚、善根薄少にして三界を流轉して火宅を出でずという表現は如何にも聖者に通ぜぬが如く感ぜられる。蓋し聖者とは多くの行徳を持ち、それによっていつかは出離之縁を持つものだからである。

然しそれは機の深信の領解において未だ徹底せざるものがあると思われる。何故なら、機の深信は、出離の縁あることなしと云い、又三界を流轉して火宅を出でずとあるようにそれは単なる自意識の領域ではない。寧ろ人間的意識として至誠であり得るといふ自我の崩壊であるから、かくの如き人間の深層は自意識として覺知せられるものではないであろう。却つて清淨真実なる如来の光によつてのみ照し出されるものである。清淨真実なる如来の光によつて照破せられる限り、人間の修する善根は薄少であり、虚仮雜毒の善でしかあり得ない。そこに罪惡深重、煩惱具足の凡夫と知らしめられ、自ら自力貢高の心が捨てられるのである。まことに機の深信は如来の大悲心より生じたことを忘れてはならない。

更に機の深信に就いてそれが如来の大悲心より生じたことを忘れて、単なる自意識として機の深信自力を主張する説がある。殊に眞実信樂の世界は、乗彼願力のはからいなき世界であり、所謂第二深信、法の深信を重視するものであつて、そこに宗教的救いを強調するものは、この信樂の世界に帰入する前段階として機の深信を見るのである。即ち機の深信は自力の功なきを知らしむる為の方便であり、飽くまで自己に基く意識であり、それ故に自力であるとするのである。そしてここで機の深信自力説の教証とされるのは、『愚禿鈔』である。

『愚禿鈔』にあつては、『散善義』の二種深信の文を引用して私積を加え

「今斯の深信は、他力至極之金剛心、一乘無上之眞実信海也」

と云って、二種深信共に他力であることを明らかにしていられる。然るにこの私積に続いて「文の意を按ずるに、深信に就いて七深信有り、六決定有り」と云って、七深信を列ね、その第一に

「第一の深信は、決定して自身を深信する、即ち是れ自利の信心也」

と云っていられる。ここに自利の信心とある語は、宛も第二の深信を挙げて

「第二の深信は、決定して乗彼願力を深信する、即ち是れ利他の信海也」

とある利他の信海に対応するものである。もと自利利他の名目は四重五重の意味があるとせられるけれども、最も一般的に云えば、それは自力他力の異名である。現に至誠心積には自利真実と利他真実が自力他力の意味で分別せられている。然れば今自利の信心とある以上、機の深信は自力といわねばならぬとするのである。

之に就いて智暹の『愚禿鈔樹心録』に一義をあげて、若し機の深信を自力懺悔の分齊とすれば、それは自利各別の信心であり自力に通ずるから自利の信心と云うといっている。又義教の『模象記』にも一義をあげて、凡夫入報の正因はただ信法にあり、信機は信法の為の前方便であつて自力の懺悔に同じく、まさしく入報の正因とはならぬから自利に配したと説明している。

然しかくの如き解釈は全く機の深信の真意を知らざるものと云わねばならない。もと懺悔とは、自分の罪を悔いてゆるしを求めるものである。譬えば『往生礼讚』に、日没讚の下に要懺悔、中夜讚の下に略懺悔、広懺悔を説く文を見るに、それは信機の文とは大いに異り、ただ無始已来造りし罪を懺悔して、之より後は更に造らじということである。即ちその懺悔を終つて

「今三宝の前、法界の衆生の前に於て発露懺悔し、敢て覆蔵せず。乃至是の如き等の罪、永く相続を断じて更に敢て作らざらん、懺悔し已りて、心を至して阿弥陀仏に帰命したてまつる」

と結ばれている。かくの如き懺悔は明らかに信法の為の前方便があつて、信機の文意とは異なるものである。信機の文

は自身の分限を顧み、出離之縁なしと自力を離るることではなければならない。蓋し機の深信は罪悪生死の凡夫という、そしてその罪悪生死を離ることを得ざる無辺の罪障自覚である。従ってそれは懺悔によってうち消される如きものでなく、懺悔すればする程罪障の深重なることを感ぜしむるのであって、それは個人的な自意識の領域ではない。寧ろ人間そのものが持つ罪障の深淵であり、かくの如き深淵を照し出すもの、それ故に自力無功と知らしむるものは如来の大悲心の外はない。かくの如き罪障の深淵が直接自身に感知せられるところに機の深信がある。然れば機の深信が自利の信心と云われるのは、自力の信心ということではなくて、人間そのもの一切衆生に遍在する罪障の深淵を自身に感知するからであって、「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」という感知は、機の深信が如来に大悲される自身の姿であることを知らしめられる。されば機の深信は却って大悲心の徹底するところにあり、第二の深信は無有出離之縁の衆生を機として成就せられた如来の大悲心を信するのである。従って無有出離之縁と信する信の中に、法の深信が成就するのであって、法の深信なき機の深信は最早眞實の信心ではない。無有出離之縁と知らしめるものは如来の大悲心であり、その大悲心を信知することなしに、信心が成就するはずはない。無有出離之縁の衆生を機として願力摂受の弥陀の法が顕現するのであって、ここに我々は法の深信を明らかにせねばならない。

三

凡そ機法二種の信心といっても、二種別体の信心があるわけではない。既に善導の疏文にあっても、深信を『大経』の成就文の信心に合して「深信之心也」といい、『礼讃』では自利各別の自力の三心に対して眞實信心といっている。されば宗祖は『愚禿鈔』には「一心の言は眞實信心也」とあらわし、「信巻」には「一心即ち是れ眞實信心なり。是の故に論主建めに一心と言へる也」とも、信業釈の下では「是れを利他眞實の信心と名づく」といい、三心釈の結

には、「信とに知んぬ乃至是れを真実信心と名づく」といって、信心は一心であり、信樂であることを明らかにして
いられる。和讃に「論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたま
ふ」とあるが如く、真実信心が機法二種の深信に開かれたのであって、それは他力廻向の信心として二種一具でなけ
ればならない。まことに「煩惱具足と信知して、本願力に乗ずれば、すなはち穢身すてはてて、法性常樂証せしむ」
であり、煩惱具足と信知して(機の深信)本願に乗ずるところに法性常樂を証得せしめられるのである。それ故に『六
要鈔』には、

「所信の事を顕す、是れ則ち機法二種の信心なり」

と釈して、所信の事において能彼の法を信すると所彼の機を信ずるとの二相があるから暫く二種を分つけれども、そ
の体は一の深心であり、信樂であり、信心であり、一心であることを釈顯せられた。『真要鈔』に成就の一念を釈し
「かの如來の名号をききえて、機教の分限をおもひさたむるくらゐをさすなり」

とある如く、機法二種の深信は聞其名号の一念に具わる二種の信心なのである。それ故に『改悔文』では、「もろ
くの雜行雜修自力の心をふり捨て、と自力を捨てると、「阿彌陀如來われらが今度の一大事の後生御たすけ候え
とたのみ申して候」と彌陀をたのむとの中間に、「一心に」という言葉が置かれていたのであって、この一心は前後
を貫く意味を持っている。又『御文』二一一五には

「夫当流の安心のすがたはいかゞなれば、まづ我身は十惡・五逆・五障・三従のいたづらものなりとふかくおも
ひつめて、そのうへにおもふべきやうは、かゝるあさましき機を本とたすけ給へる彌陀如來の不思議の本願力なり
とふかく信じ奉て、すこしも疑心なければ、かならず彌陀は撰取し給べし」

と機法二種の信心を明かし、

「このこゝろこそ、すなはち他力真実の信心をえたるすがたとは云ふべきなり」

と結び、それをうけて

「かくのごときの信心を、一念とらんずる事は、さらになにのやうもいらす。あらこゝろえやすの他力の信心や、
あらしじやすの名号や」

と嘆じていられる。これによって一心の信心を開いた機法二種の信心であることは明らかである。更に『和語灯』にも

「我身のほどを信じ後には仏の願を信するなり、但し後の信心を決定せしめんがために初の信心を挙げたるなり乃至
仏の本願をば疑はねども、我の心のわるければ往生は叶はじと申合たるがやがて本願を疑うのにて侍るなり」

と二種の信心は離るべからざるものであって、若し離れて存するならば、それは眞実信心ではないことを示している。かくて若し自力を用いるならば、煩惱具足無有出離之縁とは信じ難く、自力無功と信するものは火宅を出でず出離之縁あることなしと云わざるを得ない。そしてかくの如く自力無功と信することがそのまま畢竟成仏の道路なる本願に帰することではなければならない。

かくて無有出離之縁と感知する自身に対して彼の阿弥陀仏の四十八願が法の深信として感知せられるのである。然るに阿弥陀仏の本願は十方衆生を所被の機として開かれた法のまことである。その法のまことは又自身の上に感知せられるものである。自身も救われるというところに十方衆生が救われるという本願の広さがある。こゝに宗祖が第二の法の深信を利他の信海といわれた所以がある。

常没常流転自力無功の信知において阿弥陀仏に乗托するところに法の深信がある。そしてそこに定得往生の確信を得るのである。然れば法の深信を明らかにするものは廻向発願心であるといわねばならない。何故なら、廻向発願心は「必ず決定して眞実心の中に廻向せしめたまへる願を須ひて得生の想を作す」ことで、然もこの心深信せること由し金剛の如くなる深信である。それ故に至誠心は機の深信に包まれ、三心は結局第二の深心に極まるのである。それ

故に元祖は『和語灯』に

「三心は区に分れたりと云へども要をとり詮を簡て是を云ば深心に収めたり」

「衆生称念必得往生と知りぬれば、自然に三心を具足す」

等と明かし、念仏行者の具する三心が二種の信心即ち他力の一心に極まることを示していられる。それ故に『選択集』にあっても、三心章の標文には「念仏の行者必ず三心を具足すべきの文」と標しながら、「生死之家には疑を以て所止となし、涅槃の域には信を以て能入となす」といって三心を深信ひとつに帰し、その深信は二種の信心であるから「今二種の信心を建立して、九品の往生を決定する者也」

と結んだのである。

然し、廻向発願心と法の深信とは直ちに一であるのではない。何故なら法の深信は彼の阿弥陀仏の本願に乗托することをあらわすに對し、廻向発願心は「彼の無漏無生の国」に生れんと願うことを説くからである。即ち法の深信は直ちに如来を仰ぎ、廻向発願心はひたすら浄土に生れんと願うのである。勿論、如来の願力に乗托することにおいて浄土を願生し、浄土を願生することにおいて深信を得るのであるから、それは如来に對向するか、浄土に對向するかの異りに過ぎない。然し真に無有出離之縁の痛みにおいては、願生心に依て深信を得る廻向発願心こそ切実な意味を持つものと云わざるを得ない。

思うに善導の廻向発願心の積は、至誠心の積がそうであったように、善導自身に体験せられた人間苦から出発していることが偲ばれる。即ち廻向発願心を積して

「廻向発願心と言ふは、過去及び今生の身口意業に修する所の世出世の善根、及び他の一切の凡聖の身口意業に修する所の世出世の善根を随喜して、此の自他所修の善根を以て、悉く皆な真実の深信の心の中に廻向して彼の国に生ぜんと願ず。故に廻向発願心と名づくる也」

と云う。まこと無漏無生の淨國を願うものならば、穢惡汚染貪瞋具足のままで往生することはできないのであって、身口意の業に修する解行は眞実であり、その眞實心に基く善根を持たねば、如何にして彼の國に生れることを得るであろうか。本生譚に語られる如き幾多の善根が仏道の証悟を將來したように、何らの善根なしに淨國を願うことは、宛も術通なきものが空中に遊ばんとするが如きものである。それ故にこそ、古来の聖者が身を削るような苦行のなかにその行業を淨め、それによって淨國に生れんと願うたのである。然るに我身は現に罪惡生死の凡夫、曾無一善の身ではないか、まことに解行不同の邪雜人が云うように

「汝等衆生、曠劫より已來及び今生の身口意業に、一生凡聖の身の上に於いて、具さに十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等の罪を造りて、未だ除尽すること能はず。然るに此等の罪は三界惡道に繫屬す、云何ぞ一生の修福の念仏をして、即ち彼の無漏無生之國に入りて、永く不退の位を証悟することを得んや」

これは現にわが身の姿である。この道理に立つ限りわが身の往生は絶望であるといわざるを得ない。まことに「地獄は一定すみかぞかし」の身である。とはいえ、それだからといって願生淨土の願いは消え去るものではない。寧ろ地獄一定の身なればこそ、淨土を願う願生心は熾烈に燃えるのである。そしてその願が眞実であれば、その願の成就する道が開かれねばならない。そこに第二の積が生れたのである。即ち

「又廻向発願して願じて生ずる者は、必ず決定して眞實心の中に廻向したまへる願を須ひて得生の想を作せ。此の心深信せること金剛の若くなるに由て、一切の異学異見別解別行の人等の為に動乱破壊せられず。唯是れ決定して、一心に捉て正直に進みて、彼の人の語を聞くことを得ざれ」

これは何と深い決断であろうか。かくの如き決断は自心から生れるものではない。その決断をなさしめるものは如来の大悲心の外にはない。されば廻向発願心の積は法の深信の内景を明らかにするものと云えないであろうか。然もこの二の積は相反するが如くであって却って相補うものである。何となれば前の積は仏教の道理に立つもので『観

経』の願の義といわるるものである。然し道理は必ずしも現実と一致しない。道理が常に行われるならば、現実が問題となることはない。道理のままに行われないうちに現実の課題がある。そしてその現実に立って第二の積が生まれたのである。されば善導の三心積は彼の宗教体験の記録であるといつていいであろう。そしてその現実体験の中に開かれたのが第二の積でなければならぬ。従つて前の積はそれによってわれわれの現実の真相を覚知せしめるものである。現実の覚知において開かれた道は、ただ「決定して真実心の中に廻向したまへる願を須ひて得生の想を作す」以外に真実の願を満たす道はないということである。かくてこそ廻向発願心は真実に深められたのである。それは宗祖によって隱彰の義といわれたものであつて、真実の廻向発願心は如来の願心に乗托する以外にはないのであつて、廻向発願心は法の深信に包まれる所以である。

このことは善導が、「唯是れ決定して一心に捉て正直に進みて、彼の人の語を聞くことを得ざれ」と結んだ言葉の上に看取せられることである。一心とは「乗彼願力」の姿であり、「彼の人の語を聞くことを得ざれ」とは無疑無慮の心である。この一心において願生浄土の志願が始めて満足するのである。そしてその一心を成就するものはまた如来の大悲心より外にはない。然も願に従つて正直に進み得ざる所に人間の深い業障があるのであつて、その業障がわが身について離れぬ疑慮の分別であるといわねばならぬ。この願に従つて正直に進む道とはただ念仏することである。然るに「念仏まふしきふらへども、踊躍歡喜のこゝろおろそかに」、「またいそぎ浄土へまひりたきこゝろ」のないのが我々の現実である。そしてそこにいろいろの疑慮に惑わされずにはいない。然しこれに対する宗祖の答は明快である。「よく／＼案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよく／＼往生は一定とおもひたまふべきなり」

と、ここには一点の揺ぎもない得生の想が光っている。それこそ乗彼願力の姿ではないであろうか。

「よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしらしめして、煩惱具足の

凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおぼゆるなり」

それは由若金剛の信心の姿である。他力の悲願は煩惱具足のわれらの為であるという決定心それこそ法の深信である。

「いそぎまひりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ／＼大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ」

何という素晴らしい願生心の徹底であろうか。まことに往生は決定と存知せしめるものは大悲大願の外にはない。

かくて『観経』の三心は深信に摂まり、その深心は深信の心である。それ故に宗祖は『大経』の三心と『観経』の三心とを対比して、頭の義に依れば異り、隠の義に依れば一であると頭わされた。誠に深信は信樂と異なるものではないのであって、その深信信樂を善導は自分の信仰体験を通して二種に開いたのであった。それは信心に二種ありということではなく、一心信樂の体験的内景を示したものであって、そのことをよくあらわすのが『礼讃』の文である。

『往生礼讃』の深信釈では疏文の如く一者二者の言を置かず、機の深信に就いては、「自身は是れ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して、火宅を出でずと信知す」といい、法の深信については、「今弥陀の本弘誓願は、名号を称すること、下至十声一声等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、乃し一念に至るまで疑心有ること無し」とそれが一連に述べられている。これ機法二種が別体でないことを示すものであって、如来願心の徹底するところに、煩惱具足の身が照し出され、照し出された自身の上にただ如来の願心が仰がれるからである。それ故に「信巻」には『礼讃』の言葉を続けて、「其れ彼の弥陀仏の名号を聞くことを得ること有りて、歓喜して一心を至せば、皆な当に彼に生を得べし」といって、機法二種の深信を聞其名号信心歡喜の一念に帰していられる。まことに本願を信じ念仏申すなかに機法二種の深信は具わるのである。そして本願を信じ念仏申す現実の生々しい体験が機法二種の深信と示されたのであって、そこに二種深信の持つ重要な意義があると思われる。